

～フィリピンの海運の歴史～

マニラの新スポット Museo del Galeon

Museo del Galeon（ガレオン船博物館）を親子で訪れました。

館内には実物大のガレオン船や航海に関する展示が並び、フィリピンと世界を結んだ壮大な海の歴史を体感することができます。



一方で、ガレオン船やガレオン貿易がフィリピンの歴史や現在の海運業とどのようにつながっているのかを十分に理解するには、専門的な知識があると一層楽しめるのではないかと感じました。

そこで今回は、長年海運業界で活躍され、現在もフィリピン人船員の育成に携わっておられ、同博物館の設立にも協力された商船三井の板野昌也様、山下悟郎様に、海事のプロフェッショナルの視点から、この博物館の見どころや現代の物流との関わりについて語って頂きます。

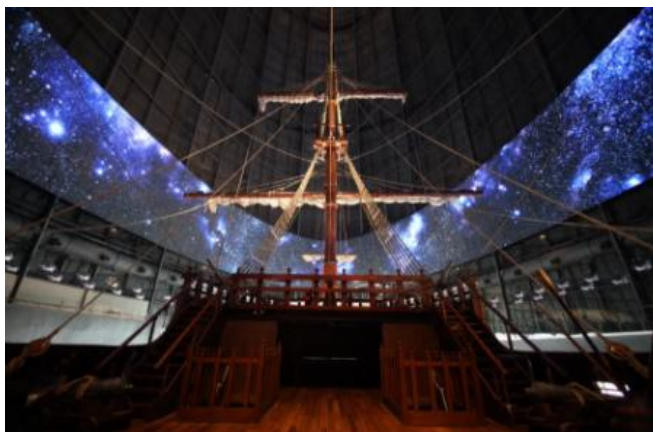
■海運業界から見た博物館の意義

海運は普段あまり目に触れない産業ですが、世界の貿易の大部分を支える重要なインフラです。Museo del Galeon は、フィリピンが何百年も前から海を通じて世界とつながってきた歴史を伝える施設であり、現在活躍するフィリピン人船員のルーツを知ることができる貴重な場所だと思います。

また、この博物館ではガレオン貿易の歴史やフィリピンの海洋国家としての歩みだけでなく、「なぜ海運が重要なのか」を学ぶことができます。私たちが普段使っている製品や食料、エネルギーの多くは、世界中から船で運ばれています。展示を通じて、海運が単なる輸送手段ではなく、人や文化、経済を結び付ける重要な役割を果たしてきたことを理解して頂けるでしょう。(板野)

■訪問時、心を魅かれた雰囲気

まず印象的だったのは、館内中央に展示されている実物大のガレオン船です。実物大の船を目の前にした瞬間、その大きさや迫力に強く魅了されました。



その周囲の天井いっぱいに設置された大型スクリーンには星空や海の映像が映し出されており、まるで自分自身がガレオン船に乗って大海原を航海しているかのような感覚を味わうことができました。

私は商船大学の学生時代に、帆船「海王丸」の乗船実習で東京からバンクーバーまで太平洋を往復帆走した経験があります。展示されていたガレオン船や六分儀、コンパスなどの航海属具を見た時、その頃の実習の思い出が鮮明によみがえりました。

当時の船乗りたちは、現在のような GPS や電子海図もない中で、星や太陽の位置、風や海流を頼りに長い航海を行っていました。私自身も実習で天測航法に触れた経験があるので、ガレオン船時代の航海者たちがどれほどの知識と勇気を持って大海原に挑んでいたのかを、身近に感じることができました。

単に歴史的な展示を見るというよりも、当時の航海を追体験できるような迫力のある空間で、非常に印象に残りました。特に海に関わる仕事をしてきた人間にとっては、過去の航海者たちとのつながりを感じられる特別な展示だと思います。

また、ガレオン船だけでなく、フィリピンの伝統的な船である「バランガイ (Barangay)」の展示も印象に残りました。



現在ではバランガイはフィリピンの行政区分として知られていますが、その語源が船に由来している事がわかり、フィリピンの人々と海との深い関わりを改めて感じました。海を渡って人々が移動し、コミュニティを形成してきた歴史は非常に興味深いものでした。

さらに、ロープワーク（ロープの結び方）を体験できるコーナーも印象に残りました。船の運航ではロープを安全かつ確実に扱うことが非常に重要であり、船員であれば今でも誰もが様々な結び方を身につけています。一般の方には地味に見えるかもしれませんが、船乗りにとっては基本中の基本ともいえる技術です。そのような実務的な技能を実際に体験できる展示があることは、とても良い工夫だと思いました。

単に展示物を見るだけでなく、「昔の船乗りがどのような技術を使い、どのように船を運航していたのか」を体験しながら学べる点が、この博物館の大きな魅力だと感じました。（板野）

■現代の商船運航との違いや共通点

最も大きな違いは、やはり船を動かす技術の進歩だと思います。

ガレオン船時代はエンジンがなく、風と海流だけを頼りに大洋を航海していました。そのため航海には長い時間がかかり、途中で嵐に遭遇したり、食料や水が不足したりする危険もありました。当時の船乗りたちは、「本当に無事に帰れるだろうか」という不安を常に抱えながら航海していたのではないかと思います。

一方、現代の商船はエンジンを動力としており、天候の影響は受けるものの、航海日数や到着予定を比較的に正確に見積もることができます。

また、船そのものも大きく進化しました。現在では全長 400 メートルの大型コンテナ船も運航されており、ガレオン船とは比較にならないほど大量の貨物を一度に効率よく運べます。

しかし、共通点もあると感じました。それは、人々の「より遠くへ、より多くの荷物を運びたい」という願いです。ガレオン船も、世界の反対側にある市場へ物資を届けるために建造されました。現代の商船も、世界中の人々の生活や産業を支えるために大量の貨物を運んでいます。

船の大きさや技術は大きく変わりましたが、海を利用して人や物を結び、社会を発展させたいという思いは、当時も今も変わっていないのかもしれない。

また、どれだけ技術が進歩しても、船を安全に運航し、物流を支えているのは船員です。船が世界をつなぐ存在であるという本質は、ガレオン船の時代から現代まで変わっていないと感じました。(板野)

■ガレオン貿易の歴史と現在の国際物流を比較して

改めて、海運および国際物流に関わる者として、ガレオン貿易の歴史を学んで感じたのは、「グローバル化は決して現代になって突然始まったものではない」ということです。

現在、私たちはインターネットや航空機によって世界が身近になったと感じていますが、実は 16 世紀から 19 世紀にかけて、マニラはすでにアジア・アメリカ・ヨーロッパを結ぶ国際物流の重要な結節点でした。中国やアジア各地の産品がマニラに集まり、ガレオン船によってメキシコ・アカプルコへ運ばれ、さらにヨーロッパへ届けられていました。これは現代で言うグローバルサプライチェーンの原型とも言える仕組みだったと思います。

現在の物流ネットワークは、コンテナ船や航空輸送、デジタル技術によって格段に高度化・効率化されています。しかし、「異なる地域で生産されたものを結び、人々の生活や経済活動を支える」という基本的な構造は、ガレオン貿易の時代から大きく変わっていません。

また、物流が運んでいるのは単なるモノだけではないということも改めて感じました。ガレオン貿易によって人々の文化や価値観、食文化、言葉などが国境を越えて広がったように、現代の物流もまた経済だけでなく、人と人との交流や相互理解を支える役割を果たしていると思います。(山下)

■「フィリピンと海」その関係についての新たな発見

私は、航海士、船長として長年船に乗り、現在はフィリピン人船員の育成や配乗に携わっています。

その中で強く感じているのは、フィリピン人船員が世界の海運を支える重要な存在だということです。

展示を見ながら、ガレオン船時代から現代まで続くフィリピンの海事人材の歴史を感じました。海運は、技術だけでは成り立たず、人材があって初めて成立する産業だということを改めて実感しました。ガレオン貿易を支えたのは船員だけでなく、それを建造した造船技術者や職人たちでもあります。現在のフィリピンが世界有数の海事人材を輩出している背景には、こうした長い海洋国家としての歴史があるのだと感じました。

また、私は入社以来フィリピン人船員と仕事をしており、フィリピンが海と深く関わる国であることは理解していましたが、今回の展示を通じてその歴史の奥深さを改めて知ることができました。

特に印象的だったのは、ガレオン貿易によってフィリピンがアジアとアメリカ大陸を結び、その先のスペインともつながっていたという歴史です。現在では飛行機やインターネットによって世界は身近になっていますが、当時は何か月もかけて太平洋を横断し、人や物だけでなく文化や情報も行き来していました。フィリピンがスペイン統治時代の影響を受けた独特の文化を持つ背景には、マニラとメキシコ・アカプルコを結ぶガレオン貿易を中心とした壮大な海上ネットワークがあったことを学びました。

現在、フィリピン人船員が世界中で活躍している姿も、決して偶然ではなく、何百年にもわたる海との関わりや航海の歴史の延長線上にあるのだと感じました。

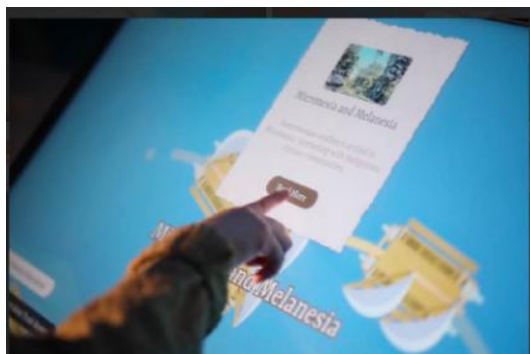
船長として世界各地を航海してきた私にとっても、この博物館はフィリピンを単なる「船員供給国」ではなく、古くから世界を結ぶ海洋国家として捉え直すきっかけを作ってくれました。

（板野）

■船に詳しくない人でも楽しめる展示

この博物館の持つ、海運や船員という職業を次世代に伝え、海事産業への関心を高める教育的な役割も大きいと感じています。

今年10月頃には操船シミュレータの導入も予定されており、実際に船を操船する体験ができるようになれば、巨大な船を動かす難しさや面白さ、船長や航海士がどのような判断をしているのかを疑似体験できる



ようになり、来館者が船長や航海士の仕事をより身近に感じる機会になることを期待しています。

特に若い世代にとって、海運や船員という職業に興味を持つきっかけになってくれることを期待しています。(板野)

この博物館を訪れて帆船や航海の歴史に興味を持たれた方には、是非、日本にある帆船関連施設にも足を運んで頂きたいと思います。横浜の「帆船日本丸・横浜みなと博物館」や、富山県射水市の「海王丸パーク」では、美しい日本の練習帆船を実際に見ることができます。

■おわりに

私自身、博物館を訪れた際は展示の壮大さに圧倒されましたが、今回のインタビューを通じて、見学時には気付かなかった数多くの発見がありました。ガレオン船は単なる歴史上の船ではなく、人や物、文化を結び付ける重要な役割を担っていたこと、そしてその歴史と精神が現代のフィリピンの海運業や国際物流にも受け継がれていることを知りました。

本記事が、これから Museo del Galeon を訪れる方々にとって、展示をより深く楽しみ、フィリピンと海との関わりに思いを巡らせるきっかけとなれば幸いです。(編集委員 AO)

住 所：SM Mall of Asia Complex Seaside Boulevard corner
Sunset Avenue Bay City, Pasay City 1300

営業時間：毎週水～日曜 10AM～7PM

入 場 料：大人 P 675、子供 (2 feet 以上) P375 (2 feet 未満無料)
公立学校学割あり (K to Uni) P275